

# 日本人の国民性調査プロジェクト 近年の成果と今後の課題

前田 忠彦 データ科学研究系 准教授

## 【日本人の国民性調査とは】

統計数理研究所の社会調査の研究グループは、1953年以来5年に一度「日本人の国民性調査」（以下単に「国民性調査」）を実施してきており、2018年秋にはその第14次全国調査が実施した。この調査は、基本的に同じ調査手法と調査内容で調査を繰り返す形で実施されており、我が国における「継続社会調査」の代表例となっている。戦後から20世紀後半以降の日本社会の価値観や意識の変化を描くための資料として、研究や教育の場、そしてマスメディア等で広く活用されている。

国民性調査の目的は、(1)調査結果をとおして、日本人のものの見方や考え方とその変化を明らかにすること、(2)実際の調査を行いながら、これからの社会変化にも対応できる新たな統計調査手法を研究していくこと、(3)調査データを解析するためのより優れた統計的方法を研究していくこと、の3点にある。

## 【長期にわたる意識の変化～大きな流れ】

長期にわたる意識変化を捉えた典型例を紹介しよう。時代が下るにつれて、古い世代に支持される「伝統的な意見」が退潮し、新しい意見が支持を伸ばしてきたという大きな流れを示す項目がいくつかある。（以下#で表示しているのは項目整理番号）。図1、図2にその2例を示した。

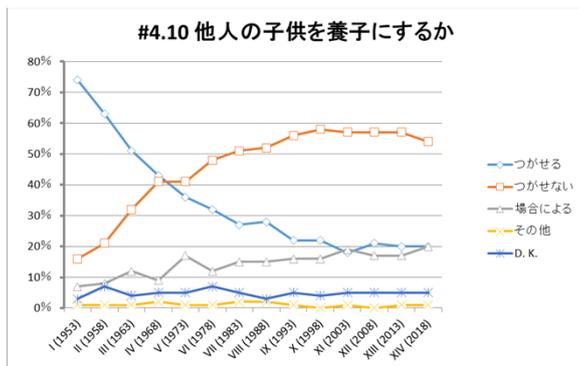


図1. 長期にわたる意識の変化を示す項目例1

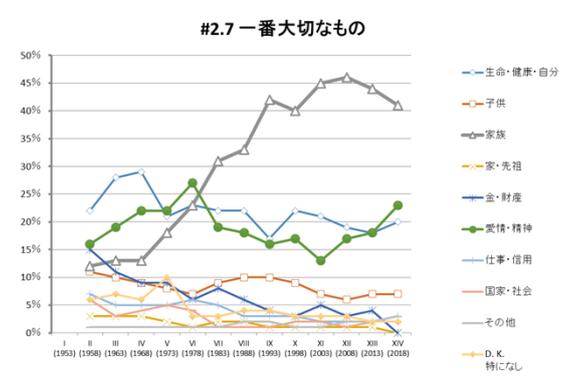


図2. 長期にわたる意識の変化を示す項目例2

図1の「#4.10 他人の子どもを養子にするか」という項目では、「子供がないときには他人の子

どもでも養子にして家を継がせる必要があるか」という質問に対して、必要ないという回答が伸びてきた（図1）、伝統的な家制度に関する意見は戦後65年あまりかけて、新しい意見に入れ替わったと言える。また図2の「#2.7 一番大切なもの」という項目では、あなたにとって一番大切なものは何かとの質問に対して、長い期間をかけて「家族」という回答が増えてきた様子を示している（とはいえ、近年は頭打ち傾向が見える。）

## 【近年の動向～安定とゆらぎ】

時代を通じて比較的結果が安定的であると考えられてきた調査項目もある。たとえば、日本人の「人情的な回答を好む」傾向は比較的安定的と考えられてきた。しかし、近年はこうした人情志向にもやや陰りがみられる。「#5.6 めんどくさい課長を見る課長」（図3）では、「仕事上の無理をいうがめんどくさいも良く見る（人情味のある）課長」と「仕事上の無理は言わないが、面倒もみない（ドライな）課長」のどちらを選ぶか質問している。以前から前者が8割後半～前半の支持を集めてきたものが、近年はややその勢いがなく、最新の第14次全国調査では74%と過去最低を、代わりにドライな課長の支持が22%と過去最高を記録した。

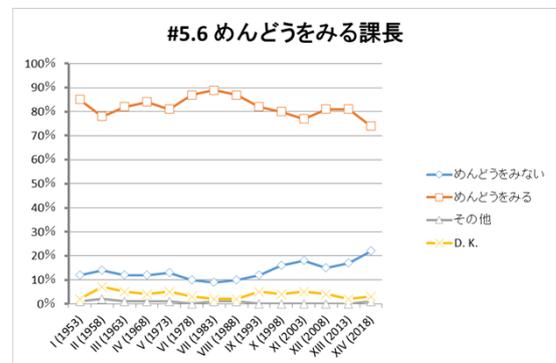


図3 長期安定から揺らぎへという変化を示す項目例

## 【今後の課題】

その歴史の長さ故にプロジェクト自体が一種の疲弊とも考えられる問題も抱えている。例えば、近年の調査では回収率が低下している、数値の変化が乏しくなってきた項目が見られる、などの点である。調査の項目内容や調査手法を変えてしまうと、本当に日本人の意見が変化したのか、それとも項目や手法の変化による見かけ上の変化なのかの区別がつかなくなってしまう。継続調査という制限の中で、いかに調査の手法を洗練させ、しかも新しい日本人の意見の動向を捉えていくのか、という間にチャレンジすることが、我々のグループに課せられた課題といえる。